そのお子の領分だとのことでした。これを聞いてその小さい親切な心は苺の實よりも赤いことや、又猥りに他人の領分を犯さないといふ正直な所などを考へ合はせまして、何や乎やいろ〳〵の點から、今日一日私は無邪氣な神聖な丸で天の世界にでも遊んだ氣か致してをりましたが、餘り私の歸りが遲くなつてはならないからといふのでまた船に乘つてかへりました、船中のさまは始めの通りでございまして、限りない愉快を得ましたことでございました、

これは又、前に參つた時でしたが、皆で謠をして聞かして下さいましたが、大きい方から行儀能く順にならんで臆さずに眞面目にうたはれましたさまは、思ひ出しても可愛らしく存じます、併し強て敎へられたのではなく、御父樣のなさいますのを段々に聞いて居られて覺えたのが多いといふことでございました。

かやうに勉强で、柔順で、又勇氣もあるといふことは餘程よく躾けなければ出來ぬことゝ思ひますが、唯私のみました所では遊ぶは勿論、仕事をするにも出來る丈子供と一所にする、能く和してゆくといふことに外ならない樣でございました、とても親は親、子は子といふやうになり其の上、召遣の者などにまかせ勝などでは、よく育てるといふことは六ケしいことでございませう。

以上は前の月フレベル會席上に話したる大要なり。

家庭に於ける所感（二）

長野縣長野市　飯塚忠次郎

（二）家庭の二大別

(イ)圓滿なる家庭、とは希望ある家庭をいふので、陰陽からいへば、陽、即ち黄金時代である。かゝる家庭の中には暖き光みち渡り、愛の泉はわき出でゝたゆることなく、清らかなる微風吹き渡り花笑ひ鳥唄ひ全家族惠の露にうるほひ渡るといふ長閑なる福音ある、丁度天上の樂園の樣な言葉をかへて申すと、其家の人々の精神が皆同一の方向に依つて進み、岐道をとらぬ、恰も完全に製作された筆の如くに、毛なみの先がよく揃つてゐる逆毛のない筆と同樣な家庭である、(完全に出來てゐる筆で以て文字をかく時は、筆は全く自分の思ふ樣に働いて文字がきれいにできるのみか、見たところでも何となくよい。之れに反しまして不完全な筆では、自分の思ひどほりにかきたくても僅か一つか二つの逆毛のために、筆のさきが甘く走りませんばかりか、みぐるしいへんてこな文字ができあがつてしまいます。

さて、右申す樣な平穩な家庭、區々たる事情の爲めにいさかへをせぬ、表裏なき整然として常に團欒和樂せる風儀の正しい家庭、此樣な家庭に朝夕逍遙して、日々暮してゆかれる人々は、私の眼からみたなら最も幸福なお方と言はなければなりません、かゝる家庭に入る時は如何なる人も自から伸らかに清くなって、世の憂き節も忘れてしまいます云ふ實に純良潔白なまぢりけのない家庭一言にて云へば健全な光明ある家庭である。

(ロ)不和なる家庭、世間一般にありがちな家庭で、陰陽から申そうなら陰、暗黑時代を演じつゝある枯野的の、ぐく淋しい鳥も來てうたはうではなく花もさかぬと云ふ、何となく平穩ならざる家庭、

一家の進路が全一でない、お互に木の枝の樣にまちまちな方向を取ってゐる、即ち逆毛筆である、筆なら逆毛の毛だけぬきとると云ふこともできるが悲しいかな人間はそうはゆかぬ、此の如き家庭では少の事にお互にがやがやいって爭ってみたり、云はなくてもよいことをいふて人の感情をそゝねて見たり、各自べつべつの、一致しない恐ろしい浪は家中にたかまり恐るべき嵐の吹きすさぶといふ不健全な家庭である、此樣な家庭に養育を受けつゝある人はどう致して高潔正直な人になることができましようか、此樣なお方は實にお氣毒なわけで、皿にもってある毒を知りつゝなめるも、同樣であります、かゝる家庭に限って、いひつけぐち、壁訴訟、耳こすり、なぞと種々樣々な言ふに堪へないものゝ製造所となってしまって、家中は山犬や狼の樣なあさましいものゝ競爭場となって、實になさけない家庭となってしまうのである、一言にて云へば恐るべき希望なき哀れなる家庭でなる。

余切に世人に望むのである、活眼を啓いて現時家庭の狀態を熟視致しましたら、どの樣で御座いましょう、千差萬別とは云ふものゝ其多くは紛糾錯綜殆んど口に言ひ文に綴る由がないのです、家庭の紊亂は概して運轉手たる者の運用如何に因るものとは申すものゝ、相互の間の我慢のあづかって大なるのである、畢竟家庭の風波軋轢を惹起するのは家人皆相互に緩急相救ひ苦樂相分つといふことを念頭に留めず、徒らに自己の嗜慾をのみ專にせんとする所から起るのである、圓滿なる家庭は一家振興の基、不和なる家庭は滅亡の礎、此樣なことはよく人々の知ってゐるところで、今更こと新し

く申すまでもないが然し其實蹟を見ることは殆ど稀れである、慨歎に堪えない事である

（未定）

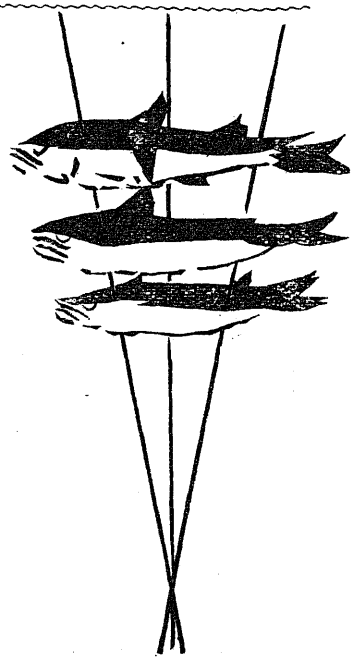
割烹十二ヶ月附錄

季節料理

石井泰次郎

◎鹽燒の鮎拵方

鮎のわたらしさを鱗をふき、腹をひらきて腸を去り、ゑらを出して、水にて洗ひ、鹽をふりつけて暫くおくべし、さて鹽をさつと水をかけて流して、金細串にさして（串にさし樣は圖の如し）、鹽をさつとふりかけ（手につかみて指の間より、おとすやうにふる）中火にてやく、まづ表となすべき方を燒て、次にそりたるをうらがへしてやく、又燒たる頃、表をかけてやき、再うらがへしてやきて、板の上におろして、そ



つと左の手の指にて押えて、右にて捻りて、次に拔くべし）此時も表になす方を上になしたる心得にて板の上におくべし

◎白煮姫百合根の拵方

姫百合根　七個　　砂糖　十四匁

白味淋酒　四勺　　食鹽　一匁五分